異世界の英雄は平和を望む

ルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の英雄は平和を望む

【Ｎコード】
Ｎ８７２３Ｑ

【作者名】
ルー

【あらすじ】
自分のことを殺人鬼と呼び、戦争を嫌い平和を望む英雄。
そんな彼が人数合わせのためにハルケギニアに転生することとなる。
転生先はトリステインのとある貴族。
はたして、彼はハルケギニアにどういった変化をもたらすのか？

プロローグ（前書き）

どうもオリ主が主役のＳＳに手を出してみました。
更新は遅めですが、ぬるりと更新していきます

プロローグ

この世界に最後に残された楽園『天国』、そこで俺はつまらない死後を送っていた。
「ふぅ・・・・・」
人殺しである俺が天国に来たのは何かの間違いなんだが、担当の死神いわく。
「お前は人を殺したことで、人を救っている。それゆえに悪行も善行も±0なのだが、私はお前のことを『天国』に行けるようにおしたい」
と言っていた。
たぶん、死神のおかげなんだろうなぁ・・・・・・・
「やっふ～、お久しぶり～」
白髪の威厳のありそうな、青年がやってくる。
まさか、ゼウスの奴が絡んでくるとは・・・
「久しぶり」
ちなみに初対面でゼウスと会話をしたとき、敬語はやめてーと涙ながらにお願いされた。
「何していたんだ？」
ゼウスの問いかけに、俺はめんどくさそうな顔をする。
「何もしていないことをしていた。」
ぶっちゃけ、俺は戦闘以外のことを知らない。
天国に来てからの数年間はただひたすら、筋トレをしていたりもしたが・・・・
あれ？これ意味ないんじゃね？と思いやめた。
「何もしてないって、何かあるだろ？ほらこの間渡した・・・」
「ゲームとライトノベルというやつか？一応は目を通したが。アレはなんだ？」
俺はため息をつく。

「おや、不満だったか？アレはね、並行世界の『地球』で『日本』というところで生まれた『サブカルチャー』だ。」
日本という言葉に少しピクリとする。
「君がいた日本とは大きく違うよ？君のいたところのように、軍隊は持っていないけどね？」
それで・・・・それだけで・・・・このような文化が生まれたというのか。
俺は少し驚く。
「まぁ君がいたところのように、政治家は腐ってはいるけどね？いし・・・おっと、いけない。」
幽霊に生きているものの名前を教えるのは、NG何だそうだ。
なんでも、幽霊はエネルギーの塊でそのエネルギーによっていろんなことができる。
たとえば、そのものの名を知ったら乗り移りその体を乗っ取れたりとか。
「で？お前がここに来たってことは、厄介事か遊びのどちらかなのだろう。」
「そうだなぁ」
ゼウスは少し考えた後、すごいいい笑顔で。
「現世に興味ない？人格と記憶そのまま引き継いでいいから。」
「ない」
何やら、面倒事を押しつけようとしたみたいだがそうは問屋がおろさない。
「普通の人間なら、ひゃっほーい生き帰れるぜぇとかいって、踊り始めるぐらいの内容なのに。」
普通の人間と一緒にするなよ。
「生きるということに、興味はない。知っているだろ？俺のことなんだし。」
ゼウスはやれやれと首を振った。
「だから、お前のことを選んだ。どの世界の生物よりも優しい人間

よ。」
俺のことをゼウスが人間と呼ぶのは珍しいな。
「ったく、理由は説明してくれるよな？ゼウスさん。」
「・・・・・・」
なんでそこに詰まるよ。
「お前が死んだあの戦いで死ぬはずだった人間は実に６億人以上。その中に後世が決まってるやつもいた。」
ふむふむ、死神からは±０と聞いていたから、俺は少し驚いたのだが。
「で、その転生先が決まっているものに、決まっておらず死んだものを当てはめてまわしていたのだが、どうも一人足りなくてなぁ。」
「元凶である、俺に行けと・・・・それなら命令でよかったんじゃ？」
ゼウスが首をふるう。
「お前、元の世界で神格化されているから、俺の魂への命令が通じないのよ。」
なんか、反則臭いな・・・・・
「だから、非常に不本意だけど、お願いするしかなかった。」
不本意なのね・・・・・
「で、転生先は・・・あの世界じゃないんだろ？」
どうせ生きるなら、あんな常時死が隣り合わせの世界は嫌だ。
「ハルケギニアと言ったらわかるか？」
・・・・こいつが渡した、ライトノベルとゲームの中にある名そういう世界が・・・・
「すべて計画通りかよ。」
「すべては、俺の意志だからね？」
諦めるか、これ以上は不毛だ
「さて、行くに当たって君の願いを聞こう、なんでもいい。」
「んじゃぁさ・・・・・俺の生きていた世界から戦争をなくしてくれ。一時的でいいから・・・・」

「わかった。ではいってこい」
俺は軽くおうといい、目の前に出現したゲートに飛び込んで行った。

ゼウスは一人彼が消えていったゲートをみる。
「君の願いはね？君の手でかなえられたよ？」
ゼウスの手にあるのは、アカシックレコードとも呼ばれる一冊の本。
そこにはこう書かれていた。
彼の英雄、世界を救い死す。
後に、彼の者が残した肉声音声が発見され、その声を聞き届けし者達、世界を平和に導かんとする。
「君が何人殺そうと、世界は君を英雄と認めたんだ。初めて会った時言ったよな？俺は殺人鬼だって・・・・」
ゼウスは軽く目を閉じる。
「君はね？自身の正義で世界から戦争をなくしているんだよ。」
ざっと音を立てながらゼウスがあるいてゆく。
「彼に祝福あれ。」

ん？
ほうほう、そういや人格と記憶があるから転生中でも意識があるのか・・・・・
暗闇だけど、ふわふわ浮いているような感覚が俺を包んでいる。
おそらく胎内だろうな。
ん～急に狭くアタタタタタ
きついきついって。
にゃ～～～～～～～～～～
今度はなんだ？苦しいいいいいい
「おんぎゃー（苦し～）」
ん？

「おぎゃ？（ん）」

もうこれはあきらめるか・・・・

ったくどうせなら、しばらくたってから人格と性格を目覚めさせてくれたっていいのに・・・・・

俺はそう思いつつ、今後の生活をどうしようと考えていた。

プロローグ（後書き）

駄文を読んでくださって、ありがとうございます。
英雄と聞かれて、フェイト想像された方もいらっしゃると思いますが・・・・・
ここでの英雄は全く別物です。
あと、天国の概念ですが・・・・どのような行いをしていても、善行と悪行を比較して善行が上回ると天国にいけることとしています。
主人公の設定で一作品を作れそうだ・・・・前世はオリジナルで短編としてけいさいしようと検討中です。
もし、掲載したらＵＲＬをあらすじに追加しますん。

1話：魔法の適正（前書き）

今回は前回と同様、事件も・・・前回は事故か・・・・・
なんも考えていないので、短めです

1話：魔法の適正

俺が生まれてから六年が過ぎた。
家族を知らない俺にとって、家族を知ることができたのは僥倖だと思う。
俺の名前はルギウス・ド・シェルベルトといい一つ下の妹、ローレアと父さんあるド・シェルベルト伯爵と母さんという家族構成だ。
軽く鏡をのぞきこむ、その目は輝くような金色で髪は白く輝いている。
前世と大きく違うのは、身体能力だろうか？
前世では実験動物だったせいで、普通の人間の身体能力があり得ないほどとろく感じる・・・・
「世界平和なんかより、身体能力元のままにしてもらうべきだったか・・・・・」
あの時は、ここまでひどいとは思わなかったからなぁ・・・
「お兄さま。」
妹のローが室内に入ってくる。
「今日は、杖の契約じゃなかったの～？」
あ～・・・忘れてたようだな。
物忘れが激しいな、前世の記憶にもある程度の欠落があるし・・・・・
「解った。父さんにはすぐに行くと伝えてくれないかな？ロー。」
「わかったー」
ローはあどけない笑顔を浮かべ、部屋から飛び出していった。
妹っていいなぁと思いつつ、自分の口がほころんでいるのに気づきあわてていつもの無表情へと戻す。。
俺は杖を手に取ると、乱暴にマントをはおい歩き始めた。
「やっと来たか、ルギ」
「待ちかねましたよ」

両親がわくわくしながら、待っていた。
「父さん、母さんまず落ち着いてください。」
六歳児のほうが落ち着いてるって、どう言うことだよ。
「息子の初めての魔法だ、喜ばぬ親がどこにいるというのだ。」
いや理由は頭で重々理解していますがね？
「落ちついてください、教える立場の人間が心を乱していては、こちらが不安になります。」
流石にいらっと来たので、少し声を荒げておく。
いらっときても口調を変えないのは、上層部との相対でなれている。
「そ・・・そうだったな。まずは火からやってみてくれ。」
すぅと息を吸い、俺の中のイメージを整理する。
とある文献に書いてあったが、魔法のイメージとは体中に流れる魔力を放出し変質させ理をだますことだと。
「火よともれ。」
だが理論上はうまく考えていても、人には得手、不得手というものがあり・・・・
何も起きなかった。
「火では・・・ないのか。」
父さんがうなだれるのを見て、少し苦笑いをする。
確か父さんは火のスクウェアだったよな・・・・
それから、風、水、土とやってみた結果、どうやら風と水の素養があるらしい。
ちなみに言うと、一族でも風と水に適性を真っ先に示したやつはいないそうだ。
これも己の魂のせいだろうかと、一瞬邪推してしまう。
「まいった、風はともかくとして、水となると教えることのできる者が家にはいない。」
「そうねぇ・・・・あ。」
母さんが何かを思いいたったようで、素っ頓狂な声を上げた。

「私の友人に、水の精霊とコンタクトをとっている人がいるから、その人に教えてもらうことにしません？」
「それは、いい考えだ。」
水の精霊とコンタクトね・・・・・・まさか、モンモランシ一族じゃないだろうな・・・
俺はそんな不吉な会話を聞きながら、ため息をついた。

アレから気になったので、文献を調べていると意外な記述が見つかった。
「ふむ・・・風は殺傷能力が高く、水は人を癒す力があるか・・・・・」
もし、魔法が血筋だけでなく魂によっても変化するものだとしたら？という仮説が立つな。
こういった具合に、本で知識をつける作業を三年間していた。
始祖に関すること、虚無に関すること、今までの政治、このシェルベルトの地の治め方などなどだ。
始祖に関することは矛盾が多く、虚無に至っては故意的に隠されている。
よくこんなんで、ブリミル教とか言って宗教を立ち上げれたレベルだなとあきれを通り越して、尊敬が先に来る。
「ふぅ・・・・とりあえずはこんなものか」
家にある書物程度の魔法なら扱う知識は入ったと・・・
「お兄さま、どこ～？」
おっと、ローが俺のことを探しているみたいだ。
「こっちだよ、ロー。」
俺はローを呼ぶと、ローはこっちに向かって走ってくる。
「おっと危ない。」
突進してきたローを抱きとめ、軽く笑う。
「お兄さま、また～？」
ハハハと苦笑いをする。

「父さんたちには内緒な？」
「うん、わかった～」
正直、父さんらにばれたらなに言われるかわかったもんじゃないからな。
「さて、いくか。」
「うん」
俺はローの手を引き書庫を抜けた。

1話：魔法の適正（後書き）

ちょっと前世の記憶が戦闘系とゼウスから渡されたラノベとゲーム
だけっていうのはきついなぁ・・・・
ボケができない・・・・
ツッコミキャラいないからする必要ないのだけど

2話：シリウス（前書き）

伝えたいことはあるのに、全部自己完結で終わってしまってなかなかうまくいかない状態で書かれた文章を、人は駄文と呼ぶんだよ（キリ

というわけで、2話（だぶん）ですどうぞ

2話：シリウス

魔法を覚えてから、約3週間がたった・・・・
驚くことにここの一週間は8日何だぜ？知ってたか？
ごめんなさい、調子に乗りました。
「お兄さま～」
バタンと勢いよく扉があき、ローが入ってくる。
まぁいつも通り突進してきたローを受け止めると、表情を緩ませた。
「どうしたんだい？ロー」
ローは満面の笑顔で俺を見てくる。
「お父さまが呼んでたの～」
父さんが？まさか、あの話じゃないだろうか？片道四日で手紙が届くとして（実際は、オーク鬼とかその他もろもろの外的要因があるので不明）これはちょっと早すぎないか？
俺は立ち上がると、ローの手を引きながら歩き出した。

父さんの部屋に入ると、父さんと何故か母さんまでもがいた。
「おぉ来たかルギ。」
俺は軽く頭を下げる。
「呼びだした理由は例の？」
「えぇ、話がまとまったから話しておくわね？」
聞くと、期間は一年間でその間は教えてもらう貴族の屋敷で生活することになるらしい。
貴族の子息が他の貴族の屋敷で生活するのは、非常に珍しいはずなのだが・・・・
「解りました。けど、父さん？大丈夫なんですか？貴族同士の兼ね合いとか。」
あいつ等は蠅のように、たかってくるからなぁ。

一応腐っても、家は伯爵家だし・・・・・・・
「そこら辺はほら・・・・力で、押しつぶす。」
お～い、後半ぼそっと言うなよ。
しかも、黒いって・・・
「さて、相手さんの家に行くまでにいろいろあると思うから、護衛を一人つけさせてもらうよ？」
なにがさてだ、なにが。
「入ってこい。」
父さんがそういうと、隻眼で黒い髪を刈り上げた身の丈2メイル以上ありそうな、いかつい大男が入ってきた。
「誰？」
いやほんとにこんなやつ知らんよ？
「こいつは、我が領地の衛兵長のシリウスだ。」
「よろしく、坊ちゃん。」
俺はあっどうもって感じで頭を下げる。
「衛兵長？あの、衛兵自体いたんですか？」
シリウスは苦笑いをする。
「王家との折り合いでね？衛兵の存在はあまり知られてはいけないことになっているんだ。」
ふむ・・・いわば、一介の貴族が戦争用の武力以外の武力を持つことを禁止すると・・・・
治安維持に騎士を派遣することで、恩を売っている。
その恩がなくなると、王家にとって不利になるからなぁ・・・
「当家の人間にも秘密っていうのが、少し引っかかりますけどね？」
俺の眼光に父さんは苦笑いをする。
「お坊ちゃん、そんなに・・・」
「解った。父さん、帰ってきたらいろいろとお話を覚悟しておいてくださいね？」
俺は準備のために、自室へ戻って言った。
あ、どこの家か聞いていないや。

まぁいいか。

「恐ろしい坊ちゃんですね？」

「あぁ、誰に似たのか。」

私はふーとため息をつくと、ソファーに深く腰掛ける。

「あの子は、どこか普通とは違って変わっていますからね。」

妻が少し、笑っている。

「それで済ます気ですか？坊ちゃんのあの目・・・明らかに戦場を体験してきた戦士の目でしたよ？」

「気のせいだろ？あの子はこの屋敷を抜け出すようなことは多々あったが、戦いを知っているはずがない。」

心当たりはある。

あるのだが、私の息子に限ってという気持ちもある。

「だといいんですけどね？」

私は苦笑いをするシリウスを見て、少しの不安を覚えた。

俺は準備を終えると、袋を縛る。

一年間といっていたから、向こうである程度荷物は増えるだろうなぁと予想しておく。

「ふむ・・・・」

これぐらいかな？と思い荷物を持つと、ホールまで歩いていく。

実際のところ執事達に持たせてもいいのだけど、呼ぶのが面倒くさかったりしたので、自分で持つ。

「お待たせしました。坊ちゃん」

シリウスは2メイルはあるであろう、大きな剣をかついでやってきた。

「それが君の武器かい？シリウス。」

いくら体がでかくても、2メイルの剣は流石に鉄の塊として考えると重い。

だが、シリウスはそれを平然と担いでいるだけじゃなく、普通の

人間が普通の剣を持つのと同じぐらい・・・いやそれ以上軽そうに見える。
普通の衛兵ではなさそうだな・・・・
「どうしましたか？坊ちゃん」
そんな考え耽っているのを見抜いたのか、シリウスは俺を覗き込んだ。
「すこし、シリウス。君のことが気になってね？」
俺は本性をちらちらと、外に露出させる。
「気になっているのは私のことですか？それとも・・・・」
察しの悪いただの兵士ってわけではなさそうだな・・・・
「その剣の持ち方についてだよ。君がいくら体躯が大きかろうと、それは人が持つには重すぎるはずだ。」
「・・・私は獣人と、人のハーフなんだ。」
父さんが普通の平民を駒として手元に置くわけがないか・・・
「そこに気づくとは、坊ちゃんアンタなにもんなんだ？」
シリウスの口調が変わった？
本気になったってことか・・・・なら俺も
「俺は殺人鬼だ。それ以上でもそれ以下でもない。」
シリウスが馬鹿にしたように笑う。
「そんな優しい目をした殺人鬼が、どこにいるというんだ？さて、不毛な言い合いはここまでにして、行きましょうか。」
そういうと、シリウスは俺の荷物を持ち馬車まで行ってしまった。
父さんたちの見送りがないのは、まぁ意味があってのことだろうと思う。
「で？シリウス。僕が行くことになる家っていうのを聞いているかい？」
「坊ちゃん？猫をまたかぶっているんですか？」
俺は少し苦笑いをする。
「かぶっていないと、いざというときポロっと出てしまいそうだからだね？思考まで、浸食されそうになるのは困っているけど。」

少し面倒だが、この口調は相手を挑発しつつこちらの考えを深読みさせるといった効果があるしな。
「俺は崩させてもらう。行く場所はド・モンモランシだそうだ。」
なるほどね・・・お互い猫をかぶっていたと・・・
やっぱり、俺のいやな予感は的中か・・・・
爵位をもっているからといって、伯爵家の人間が陛下から水の精霊との盟約を承っている名家に滞在するというのは・・・・・
考え事をしていると、石にでも乗り上げたろうか急に馬車が揺れる。
しかし、馬車は行かんね・・・ケツが痛い。
車輪がゴムでもないから衝撃がもろに伝わって・・・・錬金が使えたらスプリングでもつくったのに。
「坊っちゃん？」
「あぁすまない、教えてくれてありがとう。」
さて、これからどんな出会いが待っているだろうか。

2話：シリウス（後書き）

貴族の名前のところを一話から修正入れますラ・シェルベルト→ド・シェルベルト

この話での補足説明は・・・・今のところないです。

この後、といってもド・モンモランシまでたどり着くまでにワンエピソードぐらい入れたいと考えていますので、ド・モンモランシにいつ着くのかわかりませんが、ド・モンモランシに関しても自己解釈したというところがありますので、その部分は捕捉で記述を入れます。

3話：はじめての・・・・・（前書き）

今回は・・・・・うん

3話：はじめての・・・・

暇だぁ。
ごっついおっさん（笑）と共に、まったりと馬車を走らしているのはまだいい・・・
だがな・・・・やること何にもないと暇なんだよぉぉぉぉ。
「ついたぞ？」
馬車が止まったと思ったら、シリウスが声をかけてくる。
「ん？」
「流石に、野宿とかはできないからな？村に立ち寄らせてもらう。」
なるほどねぇ、父さんから金をもらっているみたいだし、戸尾さんからの指示かな？
「とはいえ、まだ日が高いなぁ。」
ん？村の様子がおかしい・・・・・
普通なら、物珍しそうに子供が出てくるのだが・・・・
おっと、俺も子供だったか。
「村人が一人も出てきていない、おかしいな」
あぁ、まるで村自体が何かに脅えてるような・・・
「シリウス、一人いるみたいだよ？」
俺は後ろからする気配をとらえて、にっこりと笑う。
「・・・・・」
「どうしたんだい？シリウス？」
黙りこくるシリウスの顔をのぞく。
「なんで、俺よりお前のほうが気配察知できるわけ？」
そりゃ敵陣に単機で乗り込んでたりしましたから・・・・
「僕は・・・まぁいいや。シリウスは下がってて？顔怖いから。」
リアルショボーンとするシリウスを見て、俺は少し笑った。
「出てきてはくれませんか？」
俺は少し大きめの声で、隠れている人に向かって声をかける。

「あ・・・あんたら何者だ。」
出てきたのは、２０代後半ぐらいの男だった。
「いきなりそれですか・・・・」
ふむ、これは何かあるな。
「まずは貴方の名前から言うのが筋でしょうと、いつもなら言うのですが、訳ありのようだ。僕はルギウス・ド・シェルベルトと申します。」
「き・・・貴族様！？」
すげー驚きようだなぁ。
無理もない、マントをつけ忘れているからな。
ほら、家の中でマントとか息苦しくて、普通つけないでしょ？
そもそも、国に忠誠を誓ったつもりもないからねぇ
「まだ子供ですけどね？権力とかないんで、そこらへんで威張っている貴族と同列に扱われるのは少し・・・」
「どこの世界の子供が隠れてる人間の気配を、察知できるんだよ。」
いや～この世界の子供？
「さてと・・・・率直に聞きます。何があったんです？」
俺たちはとある民家に通される。
ふむ、内装も平民にしてはなかなか。
「ついこの間のことです。」
目の前の男の声色が変わる。
その声色はまるで、恐怖と怒りで震えているように聞こえる。
「盗賊団がこの村を襲いました。」
ｏｈ、クソ重い話になってるなぁ。
「その盗賊団がこの近くに居座った、そうだろ？」
シリウスがそうつぶやく、なるほどねぇ・・・・・
人が出てこなかった理由は想像がついた。
「んじゃ、シリウス。いっちょ、盗賊団ぶっ潰しに行きますか。」
俺のいきなりの口調の変化に、男は目を丸くしている。
「坊ちゃん？危ないことは・・・・」

シリウスが止めようとするが、俺は首を横に振る。
「この国の貴族は腐っていると思わないかい？」
「「・・・・・・」」
二人は何も言わない、平民と平民出身だからだ。
というのも、平民の中で貴族は良いイメージを持たない。
ただ権力だけを振りかざす飽食・・・・俺はそう思う。
貴族なのにな。
「人を治める者は、人を守る義務がある。」
「坊ちゃん・・・・」
俺はにっかりすると、シリウスに笑顔を向ける。
「つうのは建前で・・・・ずっと屋敷にいたから、俺がどれくらい動けるのかを試してみたいんよ。」
「さいですか・・・」
立ち上がると丸めていたマントを広げ、着る。
「貴族様・・・・」
「ルギだ。そう呼んでくれ。様付けも敬語もいらん。めんどいし、何よりむずがゆい。」
男は解りましたとつぶやくと、俺をまっすぐ見る。
「ではルギ、盗賊団にとらえられた少女を、助けてはくれませんか？」
詳しく聞くと、この男がこの村に来たばっかりの時に便宜を図ってくれた夫婦が殺されそのの娘がとらえられているそうだ。
「いいぜ？っとその前に・・・シリウス、父さんたちにはこのことは・・・「いったら、俺がやられる。」」
やられるってなんだよ。
軽く笑いあう。

歩いて数時間のところにある朽ちた寺院を見つめる。
教えてもらった情報によると、ここが盗賊団のアジトらしい。
「・・・・結構いるなぁ。」

ざっと気配を感知するにしても２０人以上・・・・・
「ところで、その変な鉄の塊はなんだよ。」
シリウスは小声で声を荒げる。
器用なことするなぁ。
「ん？トンファーといってだな、なれると素晴らしく使い勝手のいい武器なんだが、なれていないとただの重りにしかならないもんだ。」
さっきは建前であんなこと言ったが、少し後悔している。
本音は戦いたくないだからな。
「そんな武器があるのか・・・・」
さて始まるぞ？
まずはシリウスが先行する。
「敵だぁ。」
シリウスが鬼神のごとき動きで、盗賊団を殲滅していく。
俺はそれを見ながら、見つからないようにアジトの側面から侵入した。
石組みの寺院は何か懐かしい気がする。
そういえば、前世ではゲリラ戦でこういう寺院に立てこもっていたっけ？
しかし・・・・寺院がでかすぎないか？
「・・・まさか、せ・・・・」
「なんでこんなところに・・・・」
ん？
何か言っている？
俺は少し近づく。
「本当に表で暴れている敵が、隻眼のメイジ殺しだったらやべぇぞ？」
何だ、その明らかダサイネーミングは・・・・
しかし、メイジ殺し・・・・か。
ますます、父さんがどうやってあいつを引き込んだのか非常に謎

なんだけど。
「っち、本物だったらヤバいな・・・・人海戦術で行くぞ。」
表にいた２０人に加え、さらに奥から３０人ぐらいの気配が出てくる。
おいおい、普通の盗賊団じゃないだろ・・・・
たぶん・・・・・奥にまだ頭の護衛として１０人ぐらい残っているな。
「さて、やるか。」
トンファーを一対構え直すと、俺は奥に向けて走り出した。
少女の気配は、奥の・・・・・一際大きく、どす黒い気配のそばにいる。
そいつが頭か・・・・。
「小僧どこから・・・メイジだと。」
少女の居場所が分かったから、俺が隠れる理由もない。
「これは俺からの頼みでは、ない。」
周りの空気があまりにも冷たく、残酷に感じる。
俺を見つけた盗賊は驚愕の顔を浮かべ、静止していた。
嗚呼・・・・
「やってしまったか・・・・まぁいい、そこをどけ。」
俺は短いほうで胸につきを入れる。
ミキミキと嫌な音が耳に響き、盗賊がゆっくり倒れていく。
その音に、何事だと８人ぐらいが一気に現れた。
「ほぅ・・・・」
そいつらは出てきた瞬間、何故か停止する。
「ふん、惰弱な・・・まぁいい・・・運がよければまだ生きているだろうよ。」
その言葉は、えげつないほど冷たく・・・・生気のないものだった。
俺は手早くその八名を無力化すると、すぅと息を吸う。
その瞬間、周りの温度が戻ってきて・・・・倒れた者たちがうめ

き声を上げ始めた。
倒れている者たちは、まだ生きているようで安心する。
「人殺しとか、マジ勘弁だからなぁ。」
俺はそう言いつつ、二人の気配がする部屋のドアを蹴破る。
「ちわーっす。お嬢さんを迎えに来ました。」
出来るだけ明るくそういう。
「貴族か・・・・まだガキということは、騎士ではないみたいだな？」
盗賊のお頭・・・ゴリラの用にもライオンのようにも見れるその男は、俺をみるなりそんなことをつぶやく。
その隣には獣を入れる檻に入った碧眼の少女がいる。
「生きるために奪うのならわかる・・・・」
対峙した瞬間、男のどす黒い気配の理由がようやくわかった。
「奪うために生きるのならばそれは・・・・それはただの略奪者だ。」
「逃げてください、いくら貴族様でも・・・・・。」
瞳に生気が宿らない状態で、少女はクソな貴族の心配をする。
「大丈夫・・・・俺の大義のために・・・・殺されてくれないか？」
この世界に来て・・・今日が初めて俺が壊れた日だろう・・・
「その殺気、実に心地いい。狩りがいがある。」
俺は弾丸のように、走り距離を詰める。
男はそれに合わせて剣を振り下ろすが、右腕のトンファーで受け流す。
「な」
それを丸で呼んだかのような蹴りに、俺の小さな体は吹き飛ばされる。
「坊ちゃん」
シリウスが追いついてきた。
こいつ・・・・５０人もの人間相手に無傷かよ・・・・
「安心しろ、俺は無事だ。それより、そこの檻破壊して少女を助け

だしてくれ。今の俺の力では持ち上げられないし、壊れもしないからな？」
すぅーと息を吸う、肺に酸素が隅々まで行きわたる。
「そのための時間は稼ぐ。」
必殺・・・・
「トンファータックル～～～～」
男が剣を振り終わるよりも早く、男の体を俺のタックルが襲う。
もともと、タックルは体重×スピードで威力が決まるもの、俺にスピードはあっても体重がない、ゆえにこの技は・・・・
「敵をひるませるためにある。」
右肩でのタックルだったので、左腕はフリーとなった。
そのフリーとなった左腕に握られたトンファーは・・・・
長いほうが男に向けられていた。
「少し悶絶しろ。」
腕の筋力だけで放たれた突きは男の腹に、沈み込んでいく。
「か・・・は・・・」
どれだけ鍛えようと・・・一点のみに力を加えた攻撃は通るはずだ。
拳より小さい円ならなおさらのこと・・・・
「坊ちゃん、終わりました。お下がりを。」
俺は一気に間合いを開けると、シリウスに代わる。
残念だが、こいつはかなりの手慣れだ、ゆえに技術だけあっても押し切れない。
「ふぅ、大丈夫かい？お嬢さん。」
さっきまでとらえられていた、お嬢さんをみる。
「何故、貴族様は私なんかを。」
「本来はね？君を助けるだけのつもりだったんだ。」
「へ？」
俺のいきなりのセリフに、少女が驚いたような顔をする。
ふと見ると、シリウスの剣が男の剣をはじいたところだった。

ん？何かおかしい。
よく見ると男の口が、呪文のように動いている。
「”コンデンセイション”」
俺は大気中の水蒸気を凝縮させて、男の顔に大量の水をぶちまけた。
「今のは？」
「レベルが僕より上のメイジに対する唯一の手ですね？」
「あいつメイジだったのか、あぶねぇ。」
といいつつ、振り下ろしでとどめ刺してるし。
「さて、君を助けた理由だったね・・・さして意味はない。」
そう・・・ただ耳に入ったから助けに来た、だけの話。
「一言にまとめると、偶然？」
偶然事件が起こって、偶然俺が助けに来ただけの話。
「そのトンファーって、武術なのか？」
剣の油やらなんやらを落とし終えたシリウスが、いきなり訪ねてきた。
「僕のは技術だね？僕のを武術といってしまうと、武術として修めている人に怒られる。」
トンファーをくるくるとまわしながら、笑う。
まぁ俺のは、勝てばいいだからなぁ。
ほらあれだ、剣道にしてもこっちで使えるというと切り下ろすか、なぎ払うかしか意味がないしなぁ。
しかも、メイジ相手になってくると、ただ単なる武器持ち対武器持ちじゃなくなってくる。
「確かに。さて、帰るか。」
俺は嗚呼と相槌を打つと、少女の手をとり歩き出した。
少女は終始あたふたしていたが。
「本当に、お二人だけでやってしまわれるとは・・・・」
帰ってくるなり、盗賊団から少女を助けるように依頼した男は、

驚きの声を漏らすが・・・・
もうちょっと隠そうぜ？本音を。
「シリウスもいたし、案外楽でしたよ？」
ザコはほとんどシリウスがやってくれたしね。
「何をぬけぬけといいますか、坊ちゃんは。大方、俺に全部ぶつけようとしていたくせに。」
何をおっしゃいますか、シリウスさんと内心で思っておくことにする。
「しかし、彼女はこれからどうするつもりだい？」
連れて帰ったとたん、両親が死んだと聞かされ防ぎこんでいる少女がいる部屋の方向をみる。
「俺が育てようと思う。」
男は、俺の目をまっすぐ見てそう言い切った。
「なら・・・・」
俺は馬車からあらかじめ持ってきていた、インク、ペン、羊皮紙を取り出すと、文字を綴っていく。
「なにをしてんだ？」
シリウスが不思議そうに俺を見ている。
「ただ手紙を書いているのだけど？」
その書面はこう書かれている。
『この手紙を持っていく、平民二人をよろしくお願いしますね？父さん。もし、僕が帰ってこの二人普通の生活を送っていない場合は・・・・あのことを母さんにばらしますよ♪そのことを頭に入れたうえで、よくお考えくださいね？僕は父さんのことを信じていますから。ルギウスより。』
「鬼だな・・・・」
シリウス・・・・読むなよ！！
「とりあえず、こいつを持ってド・シェルベルトまで行ってくれないか？馬があるみたいだし、一日でつくとは思うが・・・」
ちなみにアジトからは歩いて帰るのがアレだったので、馬をパク

って帰ってきた。
「いいのか？」
男の言葉に俺はうなずく。
「これは僕の気まぐれだから、あまり気にする必要はありませんよ？」
「気まぐれと書いて、優しさと読む。」
おーけーシリウス、よかろうならば・・・・戦闘だ。
こうして日の暮れかかった村で、本日第二戦目の戦闘が始まった。

3話：はじめての・・・・・（後書き）

今回は趣味に走りました。
トンファーの使い方おかしいとか、超論理戦闘だなぁとかいうのは
そういうものとして・・・・・
戦闘時の性格の変化なのですが、ルギウスとして人を攻撃するのに
精神が耐えられないので、昔の性格に一時的に戻ったということで。
ちなみに、盗賊団が動かなくなったのは殺気です

4話：もう一人の（前書き）

言い訳はしますん

4話：もう一人の

盗賊団を壊滅させてから4日がたった日の夕暮、俺は少しあくびをすると馬車の中でおきあがる。
「ようやくお目覚めか？坊ちゃん」
そのいやらしい言葉に、いらっとしながら手綱を握っているシリウスがいる方向をにらむ。
「で？あとどれくらいだ？」
「地図ではもうそろそろなんだけど・・・」
ハルケギニアの世界地図はあまり正確な物がない、自国の地図でさえ、貴族が書くわけだからその貴族や友好的な貴族の土地を広く書こうとする。
特にトリステインの貴族は、権力に固執したやつらばかりだからそれはそれはひどいものがあるのだ。
「当分先ですか。」
旅の二日目で猫の皮をはいで、元の口調に戻していたが、そろそろ猫の皮をかぶり直す。
「おいおい、一応有名な貴族がだな。」
「商人の書いた地図・・・・意味ないか。」
やつらは貴族に媚を売ろうと、ごまかしたりするからなぁ。
自分たちの利便性より、貴族へのごますりが大事だってことなわけだが。
「いやになっちゃうなぁ、この世界は本当に・・・・」

ようやく、ド・モンモランシについた俺は、ド・モンモランシ殿に逢いにゆく。
「よく来た。」
貴族がよく座るタイプの偉そうな椅子に座っている、金髪の貴族をみる。

「こんかいの無茶な相談にのっていただきまして、ありがとうございます。」
「いいんだよ。彼には貸しを作っておきたくてね？」
俺の前ではそうは言っているものの、本心では親父のことをとるに足らない存在と思っていそうだなぁ～。
雰囲気が少し傲慢っぽいし・・・・
「では、部屋へ案内させよう。」
一人の煤けた茶色い色の髪を持った、目に生気を無くしたメイドの格好をした１０才ぐらいの少女が入ってくる。
「でわ」
俺は彼女の後についていく。
屋敷内は豪華できらびやかな調度品が、悪趣味に置かれている。
みているだけで、頭がきりきり痛むなこりゃ。
「こちらになります。」
年下に頭を下げるか・・・・こんなガキにまで、軍隊みたいなことを世界は強要しているのか？
まぁいい・・・
俺は室内に入ると、ベットに軽く横になった。
しっかし、ここは本当にド・モンモランシなのか？モンモランシーが出てこないぞこらぁ。
少し、扉がノックされる。
「どうぞ？」
その言葉に、入ってきたのは一人の同い年の少年だった。
その少年は、金髪で青色の眼を持ち、中性的な顔立ちをしていた。
「はじめまして、ルギウス。私はアレストテレス・ド・モンモランシ。モンモランシ家の一応長男だ。」
ん？あいつに、兄弟なんかいたのか？
「一応？」
「あぁ、私は私であって、私でいてはいけないから・・・」
俺は目を細める。

彼がその言葉を発するまで、読んでいなかった気配を読み始める。
少し目を見開く。
「アレス、君は何者だい？」
彼にはおよそ雰囲気というものがないのだ、かすかにあるのは誰かに対するあこがれと、忠誠のみ。
「ルギ、君こそ何者だ？」
小一時間程度のにらみ合いが続き、どちらかともなく笑い始める。
「面白い奴だな、君は。」
お前に言われたくね～よ、アレス。
「ぼっちゃま。」
執事が俺の部屋に入ってくる。
「お嬢様が行方不明になりました。」
モンモランシーのことだろう・・・・っち、きてそうそうイベントとわなぁ
「私はいったん部屋に戻ります。ルギは客人なのですから、気にせずにいてください。」
気にせずにとは言うが・・・嫌な予感しかしない。
俺は二人が出て行ったのを確認すると、自作で作ってある杖入れ・・・この場合、トンファー入れといったほうがいいか。
「さぁて・・・・どうやって探すかねぇ？」

走り回っている獣の気配と、幼い人間の気配を追ってきたら・・・・
オーク鬼と戯れている女の子が一人、オークのほうは腹が減ったから人を襲っているんじゃなくて、人が逃げるから面白がってやっている節があるなぁ。
「モンモランシー！！」
アレスが女の子と、オークの間に割って入る。
その手には短刀が握られていた。
「あの短刀の形は・・・・」

短刀のくせに異常に柄が長い短刀・・・・・・
アレの使い方は、よく覚えている。
おっと、オークが棍棒を振りあげたようだ。
「だけどさぁ、アレス・・・・いくらなんでも無茶じゃね？」
その棍棒を軽々とはじくと、苦笑いを浮かべながら構える。
「それじゃぁ、オークの肉はさけないですよ？」
オークは自分の棍棒をはじいた俺を警戒しているのか、唸りながら様子を見ている。
ちなみに俺の体に、アレをはじき切れる力なんてなかったはずなんだが・・・・
「”凝縮武舞”」
鉄がさびそうなのであんまり使いたくなかったが、仕方がない。
トンファーの周りに水が凝縮されていく。
瞬間、オークが襲ってきた。
「きゃぁぁぁぁぁ」
俺がつぶされるとでも思ったのか、モンモランシーが妙にいやな叫び声を上げる。
ドーンという音がし・・・・・・
「やっぱり、脳が委縮しているんだなぁ？教えておいてやるよ、効果のない魔法があるわけがない。」
そこに落ちていたのは、何かによって切られたオークの棍棒と手首だった。
そして俺のトンファーにまとわりついている水は、真っ赤に染まっていた。
「ルギ、今のは？」
「さぁ？・・・・トンファービーム”発射”」
トンファーをオークの眉間に向けると、まとわりついていた水が、オークを貫いた。
「またの名を水弾という。」
一連の魔法は、凝縮をまとわせる形で行い、極限まで圧縮し動か

せる。
　すると、ウォーターカッターと同じような物ができるというわけだ。
　ちなみに、トンファービームは・・・・そいつをただ単に光速で飛ばしただけだったりする。
「・・・・いろいろと規格外だね？やっぱり君のトンファーは。」
「規格外？常識だよ。」
　そう、世界が定めた俺等に対する常識。
「人間の作りだした常識なんて、常に変わりゆく知識だからね？」
　ゆえに、考古学者とか政治家と宗教家かなんかは俺の嫌いな人種なのだが。
「大丈夫だったかい？モンモランシー嬢。」
　俺はいつの間にかしりもちをついている彼女に手を差し伸べると、彼女は顔を真っ赤にしながら俺の手をとった。
「あの・・・・」
「僕の名前はルギウスね？これから一年間よろしく。」

　モンモランシーをアレスに託し、俺は自室へと戻る。
　ん？いっしょに行けばいいじゃないって？
　なんつうか・・・・面倒くさい。
「さてと・・・一年間は動けないからなぁ。」
　平和を望むなら、戦争に備えよ。
　これから望む平和は何故か争いが起きる。
「何が動けないって？」
　気配も何もかもが読めないやつだなぁ・・・・アレスって。
「その前に・・・答え合わせと行こうか転生者、アレス」
　柄の長い短刀を繰る俺の片腕だった男・・・・
「俺を理解したのか・・・・面白い。」
　アレスからは感じられなかった気配、殺気が感じられるようになる。

だがそれは・・・・
「挑発しても、何も出ないぞ？α2。」
「まさか・・・」
アレスは目を見張る。
「やっぱりか」
俺だけが、こっちに来ていた。
あのゼウスのことだ、俺の知り合いをこっちの世界に無理やり引きずり込んでいても驚かない。
「隊長なのか？」
俺はうなずく。
「前世では、実験兵αシリーズのα1だった。」
もしかしたら、αシリーズ全員がこの世界に来ているかもしれない。
「でも、お前はどうして？」
その問いかけに、アレスは微妙な顔をする。
「地獄で裁判にかけられそうになってたところを、ちょうどいいとか言ってゼウスとか言う奴に連れ去られて、気づいたらこの世界。」
・・・・・死んだ奴やストックをうまく回していたみたいだなぁ～。
次死んだら、丸焼きにしてやる。
「しかし、隊長・・・・にやっていなさすぎでしょ、そのしゃべり方。」
「うるさい、あのさ・・・・あの後、世界はどうなったんだ？」
こいつは生き残っているはずなので、あの後のあの世界のことを聞く。
「英雄の名のもとに、世界平和条約が制定されたよ。戦争ももうない、軍人もあの世界にはいない。」
英雄？誰だろう。
「英雄か・・・・・どんなやつなんだろうな？」
「とある本の内容だけど、『常に自分のことを殺人鬼と呼び、誰よ

りも心の優しい英雄、名を【ルギウス】と少女は言った。『らしいよ？」

ほぅ・・・この世界の俺と同じ名前か・・・・

「あんただよ、隊長。」

気づいてはいたが、なんかやるせないなぁ。

最後の出撃の前に、俺に名前をくれるといったあの少女が考えた名が・・・・『ルギウス』だったのか・・・。

「悪い・・・・一人にしてくれ。」

俺は頬に生温かいものが、流れているのに気づく。

「・・・」

何も言わずに、アレスは部屋を出てゆく。

数年ぶりに泣いたよ・・・・。

本当に、ゼウスは一体何を考えていやがる。

４話：もう一人の（後書き）

柄の長い短刀は実はルギに持たす予定だった武器候補の一つだったりしました。
どうしても出したかったので・・・・新キャラを構想も終わり執筆完了した４話を削除して書いてみた
後悔はしているし、謝りたいとも思っている。

5話：杖との契約２ｎｄ

ド・モンモランシに来てから数日たち、こっちでの生活に慣れてきたころ、アレスとモンモランシーの杖との契約だったりする。
なんか一人で、凝縮と簡単な治癒の特訓だと思っていたら、他の二人がただ単に杖との契約をしていなかっただけだった。
ハッハ、ワロス
「ルギって杖との契約やったことあるんだったよな？どんな感じだった？」
猫かぶるのやめて、そう声をかけてくるアレスを見る。
「どんなんだったって、ただ杖を自身の体の一部のように扱い、魔力を通すだけだぞ？」
ちなみに、普通は早々うまくいかないはずなのだが・・・・
「お前ってただ単なる変態か、天才か解らないな。」
だれが変態だ誰が。
「あの、ルギさん？」
ん？といいながら、笑いかける。
「その腰につけている物以外に、普通の杖なんかは・・・」
「あぁ、もっているよ？」
マントの中に縫い付けられたポケットから杖を取り出す。
綺麗に磨き上げられた、霊木で作られたものだ。
「じゃぁなんで、その腰の物を？」
俺は無音動作で、トンファーを抜く。
「杖との相性は、それが自身の一部と認識しやすいものが好ましい。だから俺は意識しやすいこれを、携帯用として選んだんだ。」
「それは初耳だ。誰も教えてくれないけど？」
そりゃなぁ。
「たいていの場合、先端に魔力が集中するイメージがわく普通の杖を選択するからだな？」

この考え方が、世間一般になっているから、憶えているやつは学者ぐらいだろうなぁ。
「イメージですか・・・・・」
モンモランシーが持った杖が、ポウっと光始める。
「出来ました。」
早いなぁ・・・・
それにしても・・・モンモランシ夫人しかいない理由は・・・大方理解できるな。
ちらりと見たことに気づかれたのか、夫人は愛想笑いをする。
「ん～」
出来ず一人で唸っているアレスをみる。
「短刀でやっちゃだめ？」
一本だけトンファーを抜くと、腹に突きを入れる。
「ぐふ・・・・わかったよぅ、まじめにやれば。」
馬鹿はほっておいて、モンモランシーのほうを見た。
「”火よともれ”」
ふむ・・・・・あれか、やっぱり火系統ではないのか。
「見てみて～浮いたよ～」
・・・・先生・・・・先ほどまで杖との契約にアップアップしていたアレス君が、飛んでます。
「”凝縮””発射”」
水弾がアレスに当たり、アレスが墜落してくる。
「お兄さま・・・・」
モンモランシーがそうつぶやきながら、何か可哀想なものを見る目でアレスを見ている。
「さぁ次は水だね？やってみて。」
「”水よ”」
そういった瞬間、杖の先から水滴程度の水が出てきた。
「水系統か・・・おめでとう」
俺がそういった瞬間、目の前を石のかけらが通り過ぎて行った。

「”凝縮””発射”」
水弾がとんできた方向に向かって、放たれる。
「甘い”ロックウォール”」
土の壁がせりあがっていく、この場合水弾はアレスに届くことはないのだが・・・
「”凝縮武舞”」
飛んでいる最中の水弾に、圧を加えさらには振動させる。
「ちょ・・・それ無理だって。」
水弾は楽々と土壁を削り、アレスにまで到達する。
「危なかったぁ」
ギリギリでさけやがったか、っち忌々しい。
「お兄さまは、先ほどから何をやっているのですか？」
「なぁに、ルギの凝縮武舞みたいに、オリジナルスペルをだな」
俺は無言で殴っておくことにする。
「いたい、痛いって隊長。」
ふといつもの癖が出たのか、アレスがそんなことを言う。
「隊長？」
「ん？あぁ、騎士ごっこでね？」
ナイス、嘘俺。
「なんだぁ？そのうわぁみたいな顔は」
「なんでもねぇよ。」
ちなみにまとめると、モンモランシーが水オンリー、アレスが風と土といった結果になった。

今日のイベントは杖との契約だけで、特訓も何もなかったため、自室に引きこもって本を読んでいる。
魔法について書かれた本とは実に興味深いもので、それぞれが違う思想、違う理念のもとによって書かれている。
これは、魔法がイメージを形にするものであり、そのイメージは一人ひとり違うからだ。

「理を捻じ曲げるのはそいつが持つ、意志力と解釈できるか・・・」
ブロット・アロウス・ド・ホウフマン侯爵が書いた本を読み、少しにやりとする。
この作者、5爵の第2位の爵位を持ちながら、魔法の研究にばかり明け暮れているという、かなりの変人なのだ。
変人というだけだったら、読みもしないのだが、書いてあることがすべて的確で正直、彼が書いた本をすべて読めばたいていの魔法が使えるという噂があるからだ。
「へぇ魔法理論の本か。」
俺はいつの間にか部屋に入ってきたアレスを、殴っておく。
「何か用か？」
「つぅー・・・・明日からのことなんだけど、水精霊に次に契約するやつを連れていかなきゃならないんだけど。」
ほむほむ、ん？水系統が使えるのがモンモランシーだけだったはず・・・・。
「お前も連れて行くんだけど、伝え忘れてた。」
テヘって感じで、舌を出すアレスをもう一度殴る。
「水精霊かぁ、確かに興味があるな。」
あわよくば接点をと思っている。
「そうなのか？また、親父がいらないことをしなければいいんだけど。」
何があったし。
「いや、こないだ水精霊に高圧的な態度をとっていて、若干精霊がいらついてたからさ。」
あぁ～ありそうだなぁ。
「土系統のオリジナルスペルとかない？」
俺は羊皮紙に書いた呪文を、アレスに渡す。
「なんだこれ？」
一応、ルーンで書かれているものの、魔法書を見ても描かれていない物となっている。

「土は鋭利な鉄に変り、風はそれを巻き上げ、すべての者を蹂躙しつくせ。という意味のルーンだ。」
「何その凶悪なの！？」
俺はくっくっくと笑う。
「メインは風系統だが、最初の土は鋭利な鉄に変りのところをいじってやれば。」
ば～、やっぱりオリジナルで作るの難しいなぁ。
「”アイアンスピア”」
こいつは錬金で鉄を作り、アイススピアみたいな形にし打ち出す魔法だ。
ちなみに詠唱はしたが、俺は土系統はからっきしなので発動さえしない。
「ま、こんな感じだな？」
「ほうほぅ、これが俺だけの呪文かぁ～」
喜んでるアレスを突き放すようで悪いが、一応・・・・
「一応、それを扱えるのは土のラインだよ？」
「つうことは、お前のアレも？」
凝縮武舞のことだろうか・・・
「アレは一様、凝縮した後に振動を加えるように微調整された凝縮を、かましてるだけだからドットでも使える。だから発射も別スペルだろ？」
「なるほど・・・」
実は最近知ったことなんだけど、ダブルシンクを使えば同時に二つの違う魔法が使える。
ちなみにたいていの場合は体を動かすと、魔法を唱えるのダブルシンクなわけだが。
「まぁ、これも僕のとんでも魔法理論の一つなんですけどねぇ～」
そうして、一日が過ぎていく。

5話：杖との契約２ｎｄ（後書き）

だんだん短くなってくるのは気のせいです。
やりたいことがあるから、遠回りして書いていたら書きにくかったことに気づき後悔なんかしていませんよ？
本当ですよ？信じてくださいよ～
（精神錯乱中）
ブロット・アロウス・ド・ホウフマン侯爵はいつかでます。そう・・・本当にいつか・・・・・

6話：水精霊と英雄（前書き）

すいません。
前回から間が明きすぎました。

6話：水精霊と英雄

西暦２ＸＸＸ年２月２日、第三次世界大戦が勃発。同年３月、宇宙から異星人の軍が進軍してくる。世界大戦のさなかじんるいはそれによって、大きなダメージを受けることとなった。」

俺はそんな戯言を聞きながら、本を読んでいる。

「相手してくれよぅ～るぎ～」

あ～うざい。多々ぁ絵

「はいはい、大惨事世界大戦ね～」

俺は何故か、ラグドリアン湖に向かっている。

今後のことを考えるなら、水精霊に逢うことは間違いではないと思うのだが・・・・・

「お兄さま、もう少し落ち着きを持たれてはいかがですか？」

妹にたしなめられるアレスを見て、苦笑する。

馬車の上では、何もやることはない現にモンモランシ領に来る時に苦痛を味わった。

「まぁ、暇なのはわかったから・・・俺が持ってきた本でも読むかい？」

こいつ等の前では、猫を被るのをやめていたりする。

「活字とかよく読めるよな。」

そうか？と俺は首をかしげる。

「ルギさんはいつも、よんでいますよね？何を読まれているのですか？」

「ん～魔法に関する論文書とかかな？」

モンモランシーに少し笑いかける。

「すごいです。」

そうか？と俺は思うのだが。

「知識をつけないと、俺は天才というわけではないからなぁ。」

「十分天才だと思うが・・・何故そんなに知識を欲する。」

理由を言えば、彼は納得するだろうか？
「争いなき世界のために・・・かな？」
俺が国の上までのぼりつめればいいだけのこと、近隣諸国を巻き込んでな。
「なんつうか・・・がんばれよ。」
アレスは解っているため、それだけしか言わない。
「武勲を建てようとは？」
「ふっ、俺たち貴族は平民を守ることが仕事だ。わざわざ、平民を危険にさらすこともないだろうさ。」
かわらねぇなと、アレスがつぶやく。

ラグドリアン湖についた俺たちは、軽く体を伸ばす。
「ここがラグドリアン湖か・・・」
綺麗なところだ、つっても緑とか、見あきたからなぁ。
ん？
波がなった湖に波が発生している？
「どうしたんです？」
「ん、ちょっとね？」
さてと、昼飯を食べるために軽く準備する。
「お兄さま、お父様達は？」
「もうそろそろで、来ると思うが」
ん？人間の気配じゃない？
俺は少し目を閉じる。
「どうしたんだ？ルギ？」
アレスの言葉が、俺の耳によく届く。
いまはそんなことはどうでもよく、この気配を探るのが先決だ。
「囲まれてるなぁ・・・・・・」
人型の、人じゃない生物、山賊相手にしていた時のような濃密な死の気配がする。
「水精霊さんよぉ、少しばかり・・・荒事にするぜ？」

俺はそうつぶやくと、トンファーを腰から抜き去る。
その瞬間、気配を発していたやつらが森の中から現れた。
巨大な二足歩行の体躯に、棍棒・・・獣臭を放つ人外の生物、オーク鬼が・・・
「ちょ・・・まて、まてなんでここにオークが。水精霊のテリトリーだろ。」
元来、精霊のテリトリーは永住型の生き物に関しては、精霊の庇護がないとすめないはずなのだ。
しかももっと言うと、オークは他の生物の肉を食べて暮らしている。
ゆえに、生物の少ない精霊のテリトリーに出ることはまずないのだ。
「無駄口は後だ。」
今は生きるために何とかしないと。
相手は、殺すことを楽しむつもりなのか、俺がアクションを起こすまで待っているように見える。
「お前ら二人は下がってろ。」
「あんたもな、ぼっちゃん」
久しぶりに聞いた声が聞こえる。
「シリウス!?」
隻眼の大男がそこにはいた。
「ふぅ、まにあってよかったぜ。」
そういうとシリウスは、一体のオークを難無く真っ二つにした。
「え、何者?」
アレスは、あきれ顔をしている。
それもそうだろうなぁ、なんせ身一つでオークを倒していくんだから。
「アレは・・・っち、”凝縮武舞”」
シリウスの防御網を抜けてきた三匹を、たたき切る。
「続いて〜トンファービーム”発射”。」

二本のトンファーの先から、水の塊が光速で放たれる。
放たれたソレは、二匹のオーク鬼の頭を吹き飛ばした。
そして、最後の一匹になったオークをシリウスがしとめて一応の終わりを迎えた。
「ふぅ・・・で。なんでここにいるんだ？シリウス」
たしか、モンモランシ領についたとたん、どこかに行ってしまったはずだが・・・・
「副業の傭兵として、ここに出るオークを狩りに来たんだ。」
うちの警備いがいに、副業もしていたなんてと驚愕する。
つうか、働いていたなんて・・・・・・
「今、失礼なこと考えなかったか？」
俺は軽く笑う。
「えっと、平民の方ですよね？」
そうか、俺やアレスと違ってモンモランシーは貴族として育っているから、軽い会話を何故できるのかが解らないのか。
「モンモランシー、俺たちの間に平民とか貴族とか言う壁は、いらないんだよ。」
シリウスもその言葉にうなずいている。
「俺たちの間には、身分を超えた信頼があると考えてくれ。」
「・・・・・・」
「すこし、難しかったかな？」
まぁ、そう育ってきた人間が理解するには程遠いだろうなぁ。

それからしばらくたち、水精霊との契約が始まった。
「で、俺等は暇なわけだが。」
「そうかぁ？」
儀式の見える場所で、俺等は待機をしている。
「俺は水精霊を見れるだけましだと思うのだけど？」
隣であくびをするアレスを眺める。
シリウスはあれから、報告があるからとか言って帰って言ってし

まった。
「単なる者よ。」
出てきた水精霊は、モンモランシ夫人にそっくりだった。
「アレがそうか・・・」
「みたいだなぁ」
なかなかどうして、スタイルがいいじゃないか。
「どこ見ているんだよ。」
「気のせいだ。」
そんなことを言いながら、俺の目はしっかりと水精霊をとらえている。
「我と盟約を交わす、新たな単なる者か。」
モンモランシーを見下しながら、そうつぶやいている。
どくんと、俺の鼓動が自身で理解できるほどの大きさになる。
なんだ？
「む？我と干渉するか、単なる者よ。」
水精霊の声にひかれるように、俺は湖に近づいていく。
「単なる者よ、名をなんと？」
「ルギウスと申します。」
俺は陛下に跪くように、水精霊に跪く。
「表を上げろ、気にいった。お前とも、契約を交わそう。」
「水精霊、貴様なんと。」
モンモランシ殿が怒りをあらわにする。
「単なる者よ。どちらが契約を請う側かを忘れてはいないか？」
水精霊の言うことは、間違いなくあたりなのだが・・・
「案外、水精霊もちいせぇなぁ。」
俺はふてぶてしくそう言い放つ、別にモンモランシ殿を助けるためではない。
「ニンゲン風情が、いきがるなよ。」
精霊は魔力の結合体であるがゆえに、怒ると魔力が重圧となって俺等に襲い来るわけだが・・・

「何故、倒れない。」
俺も少し驚いている。
どくん、また鼓動を感じられるぐらい強く脈打つ。
「再度の干渉まさか・・・・・・」
瞳の色が、金から青く染まっていく。
「我を構成する魔力が干渉した？いや、単なる者が順応したか・・・面白い。」
どう言う意味だ？それに何か・・・目が変な感じだ。
「その面白さに免じて、許そう」
・・・・・・なんか納得いかねぇ。
「ルギ、その眼は・・・」
「・・・・・・」
う～む、思うところはいくつかあるけれども・・・・・・
「十中八九、あいつのせいだよなぁ。」
すっげ～モンモランシ殿ににらまれて～ら。
「とりあえずは、水精霊よ。今の俺の状態を順応と称したな？一体それは？」
「単なる者・・・いや、主が我等と同じ力を持つようになった。それだけだ。」
ふむ、同じ力を・・・か。
「精霊魔法も使えると考えていいのか？」
「水限定でな。」
なるほどなぁ・・・
「最後にだが、これは俺の体質かどうかわかるか？」
「主の水の流れは、常人と変わらん。」
・・・なるほどねぇ、ったくいらんことばっかりしおってからに。
そのころ天界では。
「ふぇ～くしゅん。ん？誰かかっこいい私のことを噂しているのか？」

ゼウスがそんなことをつぶやいていた。

6話：水精霊と英雄（後書き）

なんか前回というか、領地離れたあたりからルギの言動があやしくなってきてる。

ということで、復活☆です♪

活動報告に今までどうしていたのかを書いておきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8723q/

異世界の英雄は平和を望む

2011年3月18日18時12分発行